

# ユースワークにおける指導法の研究

## ーワークキャンプ参加者の意識変容に着目してー

磯田 浩司／仲山 友

### 要旨

本稿では筆者らが行った、NPO法人グッド（以下「グッド」と表記）における「ワークキャンプ参加者の中長期的な意識変容を支援するユースワーク」について実践内容を報告する。参加者Aのライフヒストリーを、インタビュー及び本人の記述を用いて明らかにし、意識変容を促したスタッフの関わり方について考察した。スタッフの中長期的な関わりにより、当時大学生だったAに大きな意識変容が起こったことを示し、同じように大学生年次を対象とした活動に従事する団体・ユースワーカーの一助となることを目的とする。（なお、本文中「筆者」とは磯田を指す。）

### 1. はじめに

#### 1-1 ユースワーク、若者を巡る現状とそれに関する研究動向の概略

本実践報告では、グッドにおける活動及び参加者への働きかけを「ユースワーク」の枠組みで捉え直すことを試みたい。ユースワークとは「主に思春期以降の若者に関わる活動や事業の総称」であり、イギリスでは1970年代以降「若者のために提供するサービスという『上から目線』ではなく、若者に関わり支援する」活動であると定義されるが、（田中2015:2）グッドの活動は正にユースワークであり、他団体にはないユニークなノウハウと成功事例が豊富に存在する。筆者は2011年に内閣府のプログラム<sup>1</sup>でドイツの青少年政策視察を行ったが、ヨーロッパのユースワークの実態は政策も、現場でのユースワーカーの在り方や育成方法も先進的であり、特に青年向けのプログラムや人材の豊富さには目を見張るものがあった。一方、日本の「青少年向け」と呼ばれるプログラムは少年向けのもものが多く、大学生年次以降の青年層に対する取り組みは非常に少ない。知識偏重の偏差値教育を通過した若者が、その後も社会的な成長の機会を与えられぬまま放置される現状を鑑みるに、良質なユースワークの拡充及びユースワーカーの育成は喫緊の課題であるといえよう。

2018年の実践報告（磯田:2018）でも触れたように多くの大学生たちが大学生活に対する閉塞感や漠然とした不安感、稀薄な人間関係に悩んでいる。そして2020年から続くコロナ禍において、彼らの状況はその深刻さを増している。

先の実践報告ではボランティア・ワークキャンプ（以下「キャンプ」と表記）の構造と

参加者の気付き（価値観の変化や物の見方の変化）について報告したが、今回はキャンプだけでなくその前後の関わりを含むより長期的な観点から、参加者の変容について考察したい。

グッドでは、継続的に関わる若者たちが自己有用感を感じつつ、彼ら自身の成長を実感できるような仕組みづくりを心掛けている。中でも後述するグッドの「学生インターン制度」は、ユースワークの観点からも非常に興味深い。

先行研究としては、「大学生のボランティア活動等に関する調査」（国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター 2020）があり、ボランティア活動に「参加してよかったこと」の上位回答として、「楽しかった」「ものの見方、考え方が広がった」などが示されている。しかし、アンケート形式の調査ではその「楽し」さの程度や内容、参加前後の「ものの見方、考え方」の詳細な変化を明らかにするのは難しい。また、ワークキャンプの成果については、西尾らの研究（西尾:2015）があるが、意識変容について言及されているものの、その内容は主にハンセン病に対してのものに限定されており、ユースワーク的要素に関してはほぼ触れられていない。

## 1-2 手法 — ライフヒストリーを用いた報告

本稿はキャンプ参加者の変容の平均像を明らかにすることを目的とせず、グッドのキャンプ及びその他の活動に継続的に参加をした若者にスポットを当て、インタビューを元にそのライフヒストリー<sup>2</sup>に沿って分析する。それによって定量的データでは明らかにならない、詳細な意識変容のプロセスを詳らかにし、当時のスタッフの指導・関与について考察しながら、ユースワークにおける指導法について報告したい。本研究の背景にある団体の構造についての詳細と、別事例については紙幅の関係で別稿に譲りたい。

## 2. グッドとは — 事業の構成

### 2-1 主幹事業: ボランティア・ワークキャンプ

国内及び海外にてボランティア・ワークキャンプと呼ばれる合宿型ボランティアを実施<sup>3</sup>している。参加者層は大学生を中心に10代後半～40代と幅広く、不登校・ひきこもり経験者など対人関係が不得意な者も積極的に受け入れている。

### 2-2 事務所における事業: フリースペース・自立支援寮・シェアハウス

事務所には、不登校・ひきこもり経験者対象の「自立支援寮」、大学生や社会人が暮らす「シェアハウス」、大学生などの若者の居場所としての「フリースペース」を併設。スタッフを含め30名程度の若者が共同生活をしている。

これら複数の事業が有機的に組み合わせられることで、参加者の混ざり合いによる交流と継続的な団体への関与が可能となり、グッドにおける人間関係の独自性に繋がっている。

### 2-3 プログラムの特徴

グッドでは一般的なボランティアで重視される課題解決に加え、副産物として生まれる「参加者の成長」を同等に重要視している。自立支援事業と並んで大切にしているのが、

一見何の問題もなく見える、いわゆる「普通の」若者へのアプローチである。学校生活や人間関係の中で常に空気を読み、周りに合わせ、親や先生の言うことをこなすことでそれなりに順調に生きてきた若者の中には、漫然と過ごす毎日や迫りくる就職活動、卒業に対しこのままでいいのかと焦り始める者が少なくない。また、無自覚のまま心の奥底に苦しさや無力感を抱える者も多い。そんな層に対しても、視野を広げ、他者や自分と向き合い、価値観を豊かにすることで、自身の成長を実感できるような機会の提供を行うことを心掛けている。

## 2-4 専従スタッフの役割

専従スタッフは、筆者を含む計6名で構成される。全員が事務所内及び徒歩圏内で生活をしており、男子寮・女子寮にもそれぞれスタッフが住み込んでいる。業務は海外・国内のキャンプ事務、広報、引率、参加者対応、自立支援寮やフリースペースの運営、相談業務から炊事・洗濯に至るまで非常に多岐に亘る。心理・教育・福祉等の専門知識は必須ではなく、若者の人生と対峙したいという思いの強さが重視される。

## 3. グッドにおけるユースワーク

### 3-1 参加者の「成長」

グッドにおけるユースワークで重要視する「参加者の成長」は、学校教育や一般社会で求められる「能力を高め成果を出すこと」や「到達点に向かって努力し、人より優位に立つこと」ではない。曖昧な概念であるが、あえて言語化すると「世界を知り自身の可能性を広げ、自分や他人との向き合い方を知ることで、肩の力を抜き、自身も相手も気持ちよく在れる人づきあいを学び、前向きに人生を歩んでいけるようになること」である。

また、その成長には、画一的な基準が存在しているわけではない。スタッフは参加者個々人と丁寧に向き合い、彼らの「しんどさ」の原因や限界だと感じているポイントを突き止め、それぞれの性質・性格・能力に合わせて「自身が考える理想の在り方」をイメージし、それを目指すにあたって乗り越えるべき「課題」を見極めている。参加者の変化は振る舞いや行動だけでなく「ものの見方や考え方」など、個人の意識の変容としても現れる。本実践報告においてはその「課題へのアプローチ」を通じた「参加者の意識変容」に着目する。

### 3-2 ユースワーカーとしてのスタッフ

参加者にとってのスタッフは、一般的な企業インターンに対する社員のような、業務の指示を出す指導者的存在には留まらない。参加者のコンディション・課題・人間関係を観察・分析しながら相談に乗ったり、アドバイスをしたりするメンター的な存在として彼らを支えていると考えられる。また、スタッフ同士での情報共有も頻繁に行う。

### 3-3 グッドのユースワークにおける学生インターン制度の位置付け

2014年より「学生インターン制度」を取り入れた。企業での就業体験とは趣を異にしており、参加する学生が成長することを目的とした取り組みである。団体への貢献を期待

している部分もあるが、変容の可能性や必要性がある者が、より自然な形で関わり続けられる仕組みという側面が強い。

公募はせず、スタッフが候補者を選出する。明確な選考基準はないが、人と関わることに前向きで、活動を通して大きく成長しそうな印象のある者が候補となる。リーダーシップのあるタイプも含まれるが、能力の高さや器用さだけが重要視されるわけではない。それまでの人間関係では失敗してきたが、それをどうにか乗り越えたいと思っているような者も含まれるのが、グッドらしい特徴である。加入時期は人により異なるが、初回キャンプ参加直後が多い。基本的には開始から大学卒業までの期間、継続的に活動する。

活動の内容は、事務所での炊事・洗濯・掃除などの日常業務から、事務作業、寮生との運動、フリースペース利用者対応、イベント・説明会などの運営、広報活動、SNS活動など多岐に亘る。気軽にスタッフや他のインターン、そしてOB・OGらにも相談することができ、活動のことだけでなく、それぞれのプライベートな話題も語り合う関係性が構築されている。

## 4. 参加者の「主観的現実・意味世界の変容」

### 4-1 実践報告の手法

対象者の発言や記述をもとに意識変容が起こったと考えられる契機に対して、当時のユースワークにおけるポイント（意図・内容）について筆者が考察を加える形で報告する。対象者の証言については、インタビュー動画<sup>5</sup>、及び自由記述形式の振り返り<sup>6</sup>から収集した。インタビュアーはAと親しい関係にあるBである。筆者考察は、当時のスタッフの記録と、グッドの構造と参加者の変化について考察するための研究会<sup>7</sup>における発言を参照して報告する。研究手法としては特殊だが、本音に近い主観的な内省に対し、携わったスタッフや筆者の考察を加えた客観的な報告となっている。なお、筆者の解説・解釈についてはA本人にも誤認や違和感がないかの入念な確認を行った。

### 4-2 対象者A（女性）について（概要）

1992年愛知県出身。2012年東京の私立大学法学部に入学。2015年、休学を決めた大学3年次3月にタイでのキャンプに初参加。同年5月よりインターンとなる。中学校でのいじめによる不登校、高校中退を経験。高等学校卒業程度認定試験を利用し大学に入学したが、同年代が苦手な友人もなく、サークル・バイトなど人に関わる活動を避けて一人暮らしをしていた。

### 4-3 Aを研究対象として選定した理由

①大きな意識変容が観察されたこと、②スタッフの関与が頻繁であり、ユースワークの効果があげられた事例と考えられたこと、③人間関係に大きな悩みを抱えつつも、インターン活動の中心的人物であったこと、の3点から研究対象として選定した。その変容とスタッフの関わりについては他のケースとの類似点なども多く、グッドにおけるユースワークの全体像を捉えるよい例となっている。

#### 4-4 初めてのワークキャンプ体験

以下、対象者の発言と記述、そして筆者考察に分けて報告していく。

まず、初めて経験したキャンプ(実施国:タイ)に関するインタビュー内容を検討したい。

Aは次のように述べている。

B:どんなタイミングで(グッドに)来ることになったの?

A:大学3年の終わりに、卒業を1年延ばそうと思ったんだよね。就活がすごく怖くて、精神的にもだいたい落ちちゃってる状態で。(中略)元々国連とかに就職したいみたいな気持ちもあったから、何か海外ボランティアやりたいみたいな気持ちもあって。一つ自分で何かやってみようと思って、海外ボランティアに行くことにして、(予備校の先輩に)相談をした。

B:ふーん。それが一番初めなんだ。

A:そう、そしたら「じゃあグッドさん紹介するよ〜」って言われて(事務所に行った)。

B:で、そこで(キャンプに)行こうって風に(思ったの)?

A:そこでは行こうと思わなかった、正直。(中略)怖かった。人がいっぱい(キャンプ紹介)ムービーに出てきて、(中略)こんなに人と泣き合っただけ抱き合っみたいなのに自分があることが想像できなくて(中略)明るくて眩しすぎて、私は一生ここに来ることはないし、ここが私の居場所になることはないだろうって、その時なんか日記に書いた気がする。

2015年1月23日、A初訪。対応した男性スタッフX(以下X)はAの印象を「明るくしつかりした女の子」と記録している。Xはキャンプの動画を見せながらプログラムの説明をした。Aは10日間ほど悩んだ後キャンプへの参加を決意する。その後、次のようにインタビューは続く。

A:ずっと自分にばかり気持ちが向いていて、ワークとかやっても(中略)今のバケツの渡し方これでよかったのかなとか(中略)一挙一動がすごく不安で、(中略)多分そのストレスがかかりすぎて、体調崩したのね。で、お家(ホームステイ先)で寝てただけど、(中略)(みんなが)手紙をくれたのね。私それまで、「海外ボランティアに来たのに体調管理できなくてダメなやつだ」とか、「みんなが頑張ってるのにお前だけ寝てて」、「どうしてくれるんだ」とか、みんなそう思ってると思ってたの。だから(中略)すごい不安だったんだけど。みんな書いてくれてたことが「ゆっくり休んでね」とか「良くなったら一緒にワークしようね」とかばっか書いてあって衝撃だったんだよね。(中略)人ってあったかいんだなって思って、「みんなこんなふうにしてきてくれたんだ」ってびっくりして。

B:思ってたような自分の印象と、人からもらったことが全く違かった?

A:違った。びっくりした。

B:気持ち悪さや、「どうやって見られてるんだろう」みたいなやつは、スッとした…?

A:そこからは安心してみんなと関わられるようになって、(中略)「あ、こういうところでだったら自分って前向きに生きられるんだ」とか、「生きてる感じがするんだ」って思った。

B:そこで(意識が)変わったから、グッドに関わろうと思ったの?

A: そうだね、このままで終わっちゃダメだっていうか、このまま元の生活に戻るのが怖いなって思ったし、元の生活に戻ったらまた(気分が)落ちるよねっていう話を(スタッフ) Xと最後にミラー(タイでの活動施設)でして、「このタイの(キャンプの)状態は維持できないけど、日常に戻ってもこれ(自身のいい状態)をなんとか続けていくことができるといいね」って言ってもらえて、「そうだな」って思って…。

**筆者考察**— Aにとって初めてのキャンプは、他人への恐怖の意識転換が行われた契機となった。キャンプ中は、参加者の日記をスタッフが毎日確認する。人前では明るく振る舞うAだったが、日記にはネガティブな言葉が並んだ。Xはその都度話を聞き、周囲への不信感や思い込みをポジティブに変換する方法を共に考えた。体調不良で寝込んだことで周囲の印象を酷く気にするAに対し、Xは皆からの励ましの手紙を届け、Aはそれにより周囲が自分に対して愛情や心配を抱いていることを初めて認識し、安心感を覚えた。

「最終日の気持ちカード」<sup>8</sup>にも、「明日日本に着いてから、自分がどう生きていくのか。まだ頭で考えられないけれど、不安だけは抱いている。」と記述があり、XはすぐにAと話をし、帰国後の日常に不安感を覚えるAに対して、継続的に事務所に来ることを勧め、タイで経験した自身のベストな状態を維持することが重要なポイントであることを意識づけさせた。周囲との人間関係を構築する必要性を感じたA自身も、グッドに関わることでその力を高めていきたいと思うようになった。

#### 4-5 インターン参加、留守番キャンプ<sup>9</sup>

インターンとして週1回以上事務所に通うようになったAは、「留守番キャンプ」をきっかけに事務所に寝泊まりするようになる。インタビューは次のように続く。

A: インターンになって、長野キャンプの留守番キャンプを、たまたまXに声かけてもらって(やることになった)。(中略)「ご飯とか作ろう」「スタッフ手薄だから」みたいな。(中略)やっぱり求められたり必要とされるのはすごく嬉しかったし、(中略)自分もやってもらった分作れる立場になりたいと思った。(中略)8月(に)(中略)「事務所でまた留守番キャンプしたいです」って(女性スタッフ)Yに言って、「いいよー」って言ってもらって。1ヶ月くらい住んで、毎日事務所で布団敷いて寝泊まりして。いろんな人(が)来るわけ、夏休みだから。昔のキャンパーとか。ご飯作って、朝6時に起きてみたいな。

B: その生活は、新鮮だったの？

A: 楽しかった。全然苦じゃなかった、私。「休みたい」とか全然思わなかった。

**筆者考察**— 初キャンプ後、XはAに「インターンになってみないか」と提案する。そのまま一人暮らしの生活に戻れば、元のネガティブな思考のループに囚われてしまうと予想されたからである。グッドに継続的に関わることで、他のスタッフや住人<sup>10</sup>、他のインターンとの接点が増え、肩書きのない人間関係を獲得し、安心できる居場所と感じるようになっていった。Aは「たまたま」と語っているが、実際はスタッフがAの状況を考慮し、事務所で人との接点を増やした方がよいと考え、意図的に声をかけていた。

留守番キャンプ中、料理や広報が得意で世話好きなAに対して、スタッフは意識的に仕事を任せ、感謝・承認することを通して、自己有用感や「ここにいてもよいのだ」という安心感を持たせるよう心掛けた。Aはこの経験を通して誰とでも積極的に話ができるようになり、こなせる業務も増えて、徐々に自信をつけていった。

#### 4-6 住人となってからのスタッフとの関わり

2度の留守番キャンプの後、「グッドのシェアハウスで生活してみても」とスタッフから提案され、自身もそれを望んでいたAはシェアハウスへの入居を決意する。当時の自分の状態を、Aは次のように回顧している。

A: (私は) 気持ちの波も激しいし (中略) 周りに対してこういう自分であろうっていうことは全然できてなかったんだよね。(中略) その度にこう、怒ってもらって、叱ってもらって、突っ込んでもらって、あーもうだめだって思いながら、頑張んなきゃって思うみたいな。

A: コージ兄 (筆者) に「安定しなさい。Aはとにかく安定すること」って言われてたのも (中略) 「(他のインターンの目標と比較して) 私の課題は安定 (すること) か」みたいなのが情けなくて。

A: グッドは (スタッフや住人が) 「どう？」って聞いてくれるし、関わってくれる。自分がうまく関われなくても関わってくれるから、そこに救われたんだろうなって思う。不器用でも (中略) 話しかけてくれるじゃん。見ててくれるし。自分がいっぱい見えないところ (課題) があってもそこを見ててくれるし、考えてくれる。自分のことなんて自分が考えなきゃいけないのに人が考えてくれるじゃん。それがすごいことだなと思って。

**筆者考察**——より親密な人間関係に身を置くことで、非日常だからこそ維持できていた、明るくしっかり者の姿が崩れていき、自身の課題である「不安定さ」が露呈することとなる。この時期は課題を自覚させ、乗り越えさせるための重要なタイミングであった。

インタビュー中の「突っ込む」という言葉は、グッドでよく使われる用語である。それは本人が抱える問題点をただ指摘するのではなく、それが周囲からはどう見えるのか、なぜそれが起こっているかを、構造化・言語化しながらユーモアを交えて伝え、それを自覚させることである。スタッフはAと生活を共にしながら、これまでは露呈しなかったAの課題に対して、適宜「突っ込み」を入れ続けた。

グッドに出会う前までのAは、他者と関わった経験が非常に少なく、コミュニケーションや自身の感情・体調のコントロールの仕方が全く分かっていなかった。物事の理解が早く、いろいろなことを器用にこなせる反面、ちょっとしたことで傷ついたり落ち込んだりするとそこから立ち直るのに時間がかかっていた。一方で、人からほめられたり認められたりすると「調子に乗りすぎる」傾向もあった。また、精神的な負担が大きくなると、腹痛・特発性難聴・不眠・過眠など、身体的にも不調をきたしていた。

スタッフはそのようなAの課題を「不安定」と名づけ、そのことが周囲や彼女自身にどのような影響を与え、どれだけもったいないことなのかを説明し、目指すべき状態を「安定」であると伝え続けた。また、よいコンディションで彼女の力が発揮できた際には、「こ

ういうAは最強だ」「さすがAだね」とポジティブなフィードバックを強調して繰り返した。グッドで暮らし始め、スタッフの伴走の下、住人やグッドに関わる人たちとの「失敗は許されるが、自分の良いところだけを見せているわけにはいかない、簡単に遮断することのできない関係性」の中で、露呈する課題について、都度丁寧にフィードバックをし、繰り返し挑戦する機会を与える、というグッドの特徴的な支援の手法が、Aにとっても非常に効果的であった。

#### 4-7 学生生活最後のスリランカキャンプ

インターン・住人として過ごしながら卒業年次を迎えたAは、就職直前のスリランカキャンプに参加することを決意する。インタビューで以下のように述べている。

A: 最後それ(課題)をなんとかしたくて、Bたちと一緒にスリランカに行った時には、(スタッフ)Yと「何を目標にしようか」っていうのをお話をさせてもらって。その時に「(他には)何も考えなくていいから、安定することだけをまずやってみよう」と。(中略) そうしたら、自然とこう、楽しくて。

A: 最後のミーティングの前に「話すこと考えなさい」って(言われて)。日記見た時に、すごいいろんな人の名前が書いてあって、「私が過ごした2週間って、人のことで自分の心が満たされている2週間だったんだ」って。そんなこと今までなかったの。(中略) 自分はどう生きていったらいいのか、自分はなんで生きているのか、自分は生きていていいのか、みたいなことしか考えてこなかったところから(中略)「2週間、私、人のことずっと考えて幸せだったんだ」って思って、うわあって涙が出て「ああなんか、すごく幸せだったなあ」って。

**筆者考察**—— キャンプは自身の課題について非日常の空間で挑戦し、乗り越え、成長するためのよい機会となる。自分を客観視できず高い目標を掲げて調子を崩しがちなAに対し、スタッフは過去のエピソードに引きつけながら、Aが完全には自覚しきれていなかった「不安定さが課題である」こと、そして「安定」を維持することで自身が持つ力を最大限発揮できることを改めて説明し「とにかく安定した状態を維持する」という状態目標を設定し、A自身もそれまで複数回に亘って「突っ込まれて」きた経験から、納得感を持つことができた。

キャンプ中、YはAに繰り返し目標を意識させることで安定を維持させた。またAがプレッシャーを感じない状態を維持するため、過度な役割を持たせないよう留意しつつ、持てる力を最大限発揮できる適度な課題設定を心掛けることで、彼女自身が実感できる成功体験を積めるよう工夫した。その結果、Aは安定した状態で人と積極的に関わり、他の参加者の相談役やサポートに回るなど、最大限のパフォーマンスを発揮することができた。最終ミーティングの場で涙ながらにその思いを語るAに対し、Yは過去のAの状態からの変化を語りながら、Aの気付きは、彼女が自覚している以上に意義のあることであると伝えた。

#### 4-8 約2年間を通しての意識変容

Aは約2年に及ぶグッドでの活動を自由記述形式の振り返りにて次のように記述している。

学生最後のスリランカキャンプは、自分の根っこを作ってもらった経験であった。「人に本気で向き合うことが幸せである」という強固な価値観が形成された出来事だったと思う。学生時代を振り返ると、初回キャンプで価値観の転換が起こり、学生最後のワークキャンプでそれ以降の人生の道標となる価値観が形成された。

10代の頃から常に不安感に苛まれ、希死念慮が拭えず、周囲に対し拒絶感しか持っていなかった私は、グッドでそれまでと全く違う人間関係を得ることができた。学校の先生はかけてくれなかった言葉をくれて、私の根本的な悩みを聞き、病院でどれだけ検査しても解決しなかったことに対し、私が自覚していなかった課題を見つけ、どうしていったらいいかを一緒に考えてくれた。「なぜ人間だけが、生まれた時から生き方を知らないのか」と悩み続けてきたし、悩み続けることがアイデンティティになっていた自分にとって、学校や家族や友人が教えてくれなかった「生き方」をいろんな人に教わり続けてきたのが、グッドの経験だったのだと思う。

## 5. 終わりに

今回の実践報告ではAのエピソードをもとに「課題へのアプローチ」におけるユースワークについて取り上げた。Aには段階的な意識変容が起こり、そこに影響を与えたスタッフのユースワーク的アプローチは表1のように整理される。

表1

時期	意識変容	意識変容の詳細	スタッフの アプローチ
初回 キャンプ 参加時	①非日常空間での自己概念の揺らぎ	初対面の参加者との合宿生活の中で自身の想像と正反対の手紙を受け取り、他者への安心感を覚え、価値観の大きな転換が起こった。	日記でのコンディションの把握、不安を抱えた際の相談、認識の転換を手伝う
	②変化の必要性の認識と成長意欲の醸成	価値観の転換をきっかけに、自身の考えや行動を変化させていく必要性を認識し、そこに取り組んでいきたいという意欲が芽生えた。	現状を整理する、その後の取り組み方を提示する、実践できる場を与える、継続して支援することを伝える
留守番 実践時	③新しい日常と人間関係の獲得	ほとんど人と関わりのない生活から、肩書のない人間関係を得て、常に多くの人と接する空間にいることが日常になった。	定期的に関われるよう機会を作る、仲間を増やす、次の約束や居る口実を与える
	④役割の付与による自信の形成	力を発揮できる分野に挑戦することで自己有用感を持ち、自信をつけていった。	得意なことを任せる、できることを増やす、感謝を伝え承認する
住人生活	⑤親密な人間関係の深化	親密な人間関係の中で、これまで感じたことのない安心感や信頼感を得られるようになった。	表情や言動からコンディションを把握する、行動パターンを把握する
	⑥課題の顕在化とフィードバック	共同生活の中で課題が露呈。問題が顕在化した際に「突っ込まれる」ことで、自分の課題を認識し、変化の必要性を感じた。	タイミングを見逃さない、話をする機会を作る、突っ込む、繰り返しフィードバックする
	⑦失敗経験の受容と再挑戦	人間関係で失敗があっても許容され、継続してそこに居続けられる環境で挑戦・実践を繰り返した。	失敗を受け止める、次なる挑戦の機会を与える
スリランカ キャンプ	⑧課題の克服体験による自己概念の再確立	スタッフによる目標設定やアドバイスが一貫してAの支えとなる。課題を乗り越えて成功体験を積み、大きな意識変容を起こすに至った。	課題の整理と目標設定を手伝う、成功体験を承認する

想像を超えるような苦しい日々を過ごした後、私たちの元に辿り着いたAは、キャンプという非日常（ハレ）の場での成長・失敗経験と、事務所で暮らす日常（ケ）の場での成長・失敗経験の相互補完を繰り返すことで、心の底から安心できるコミュニティーと肩書きのない純粋な人間関係を獲得し、安全を確保された関係性の中で、一人では決して気づくことができなかった数多くの気づきを獲得する。それは他者の幸せや変化を自分のことのように喜べる感覚であり、親密な関係性（家族や仲間）の重要性に気づくことであった。スタッフは時に厳しく、時に辛抱強く伴走を続け、Aもそれに応えようと努力した。結果、現在のAはたくさんの仲間にも囲まれ、安定し、周囲に感謝しながら、前を向いて人生を歩き始めている。

この研究は、青年期の成長に「どんな状態でも見放さず成長を信じてくれる存在」が不可欠であり、また、課題の提示とそこへの挑戦の場の提供、そして、その結果へのフィードバックと再挑戦の場が非常に重要であることを示している。思春期から青年期にかけての絶望的な経験から一度は人間関係を諦めたAが、信頼できる仲間たちに囲まれ、前を向いて逞しく生きる姿は、コロナ渦で深刻さを増す稀薄な人間関係の中で、孤独に苛まれ、生きる意味を失いかけている若者たちも、適切なユースワークによっておおいに変化し、失われたかに見える成長の機会を再獲得できる可能性があることを示している。青年期の若者たちに向き合うことができるユースワーカーの育成と良質なユースワークの場の醸成が、ポストコロナの社会では大きな課題となるだろう。この報告が若者たちとユースワークにおける希望となればこれ以上の喜びはない。

## 【参考文献】

- 蘭由岐子,2017,『「病いの経験」を聞き取る [新版] ——ハンセン病者のライフヒストリー』生活書院。
- 国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター,2020,『「大学生のボランティア活動等に関する調査」報告書』国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター。
- 磯田浩司,2018,『若者のきっかけづくりを目的としたボランティア・ワークキャンプ ～NPO法人グッドの事例から～』日本ボランティア学習協会紀要 第19号。
- 田中治彦,2015,『ユースワーク・青少年教育の歴史』東洋館出版。
- 西尾雄志・日下渉・山口健一,2015,『承認欲望の社会変革 ワークキャンプにみる若者の連帯技法』京都大学学術出版会。

## 【注】

- 1 2011年内閣府青年社会活動コアリーダー育成プログラムドイツ団（青少年関連活動）としてドイツに派遣され、ユースワーカー育成の在り方を学び、現場の視察を行った。
- 2 本稿において、ライフストーリー的手法を用いるのは、次の理由による。蘭が述べるように、「ライフストーリー法とは、個人というフィールドに降り立ち、個人のパースペクティブから社会を考察しようという研究方法のひとつである」（蘭2017:78）。蘭はハンセン病者のライフストーリーを記述するにあたり、「個人によって、その属するカテゴリー（ハンセン病者であること:引用者）が同じでも、主観的現実・主観的意味世界は異なる」と述べている。そして「個々人の主観的現実・意味世界それ自体に多義性を認め」（蘭2017:80-81）ながら、ハンセン病者それぞれの「主観的現実を表象」することに力点をおきながら、ハンセン病者のライフストーリーをまとめている。本稿では、同様の観点に立ち、学生ボランティアというカテゴリーから、その平均像を明らかにするのではなく、ひとりの人物の「主観的現実・意味世界」の変容プロセスを明らかにすることで、ユースワークの手法の発展に寄与することを目的としている。なお、限られた紙幅で、「主観的現実・意味世界」の変容プロセスを詳細に記述するために、あえて調査対象者は一名とした。
- 3 2001年から2021年末までに178回のキャンプを実施し、参加延べ人数は3,335人。
- 4 男性4名女性2名。年齢は20代30代40代が各2名ずつ。
- 5 2020年グッドが行ったクラウドファンディング終了後に、その成功の理由を探るために始まった「グッドってなんだ？プロジェクト」の一環で行った、参加者に対するインタビュー動画。Aのインタビューは2021年3月26日にグッド事務所（東京都板橋区）で実施。インタビュアーはAと共にキャンプに参加し、親しい関係にあるBである。砕けた表現が多いが、本音の表れと考え敢えてそのまま掲載することとした。
- 6 研究会において、Aがこれまでの人生を振り返るために作成し、発表した内容。
- 7 令和2年度科学研究助成事業若手研究（課題番号20K13686）「疑似家族的な親密圏が構築される活動をモデルとしたハンセン病問題経験学習理論の構築」の研究の一環として、近畿大学西尾雄志准教授と共に2021年5月よりグッドの取り組みと構造について研究を続けている。
- 8 キャンプ最終日にその気持ちを綴る紙。裏は初日の気持ちカードとして初日の気持ちを記入している。
- 9 キャンプ期間中、引率スタッフが抜けて手薄になった事務所を宿泊しながらサポートすること。
- 10 寮生やシェアハウスで暮らすメンバーのこと。